様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２７２０

研究課題名（和文）移民言語の展開・変容のダイナミズムについての構造的研究

研究課題名（英文）Structural study on dynamism of development and transformation of immigration languages

研究代表者
張　盛開（zhang, shengkai）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：００６３１８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は中国湖南省平江県の塘坊客家語について自然談話資料に基づき語彙、文法を記述した。平江方言との400年もわたる接触の過程で、移民言語塘坊客家語は客家語の特徴を保ちながらも、基礎語彙、指小辞、尊称接辞、否定表現、アスペクト助詞など語彙や文法の面から影響を受けている。接触のプロセスには、三種類の現象が見られる。文法に関しては、元々持っていないものは、表現と用法をそのまま受け継ぐ。元々持っているものは一部の用法を受け継ぐ。語彙に関しては客家語と平江方言のそれぞれの語形が共存する。このように移民言語客家語と地元の平江方言の接触に関してジャンルが異なるものは受けた影響も異なることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
移民言語の発展プロセスを研究し、移民言語の発展趨勢、言語の混合の傾向、移民言語の形成などの理論研究に事例を提供できる。移民言語について国際学会などで研究報告や論文を発表することにより、ほかの移民言語、危機言語の研究やアーカイブにヒントを与えることができた。自然談話の録音や録画を通して、消える前の移民言語の姿を記録し、資料を保存することができた。
話者の方言意識を高め、方言に親しみ大切にされる環境作りに力を入れた。研究代表者が現地調査を実施する中で、方言の大切さを伝え、諦めかけていた話者も自分たちの言語を継承していく重要性を再認識し、孫に伝えていきたいという話者も現れた。

研究成果の概要（英文）：This project was the first to describe the vocabulary and grammar of Tangfang Hakka Chinese, which is an immigrant language in Pingjiang County, Hunan Province, China. The description is based on natural discourse materials.
Tangfang Hakka, has maintained characteristics of Hakka Chinese, but has also been influenced by the local Pingjiang dialect in regard to vocabulary and grammar since Tangfang came to Pingjiang 400 years ago. There are three types of phenomena in the contact processes between Hakka Chinese and the Pingjiang dialect. First, when a feature appeared in the Pingjiang but not in Tangfang, Tangfang adapted those expressions completely. Second, if the two languages shared grammatical features, Tangfang only adopted some of them. Third, the vocabulary of both Tangfang and Pingjiang remain in Tangfang, coexisting. For this case study we claim that the degree of influence is different for grammar and vocabulary in the contact between Hakka Chinese and the Pingjiang dialect.

研究分野：中国語学・社会言語学

キーワード：客家語　比較対照　言語接触　継承言語　混合言語　移民言語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 塘坊客家語は約 400 年前に中国広東省より湖南省平江県の山間部に移民した客家の人々が話す言語である。平江に移民してから、客家人たちは地元の人々との交流で、平江方言も話すようになり、多くの人が地元の平江方言（外部向け）と客家語（村人向け）のバイリンガルとなった。その後も客家語が地元の平江方言と混じりあいながら今日まで来ている。しかし、1970 年代から出稼ぎ労働者が増え、言語（客家語）を継承すべき若い人々が村を離れ始める。以来 50 年間話者が減りつつあるが、2000 年代初頭にはすでに言語の継承ができない状況に至っている。

(2) 研究代表者が 2004 年に調査し始めて以来、10 年ほどの間でも、客家語調査に協力してもらった話者が 2 人亡くなり、2015 年に於いて話者人数は村全体で 20 人未満である。その内訳は、90 代１人、80 代１人、70 代１人、60 代 2 人、50 代１人、その他若干名である。調査時に、50 代と 60 代の従兄弟に客家語のみで会話するように頼んだことがあるが、普段から客家語のみで会話したことがあまりなかったため、会話時間は 5 分と持たなかった。二人がそれぞれ 80 代の話者と普通に会話できることは確認済みである。

(3) これまでこの言語に関しての報告や論文は見聞・未見であるので、研究代表者の研究・調査が初例と見てよいであろう。研究代表者は 2003 年より地元の方言―平江方言の記述研究を行い、2004 年より塘坊客家語を調査し始め、2015 年までに現地調査を 4 回行った。

(4) 4 回の現地調査で収集したデータの詳細は次の通りである。1 回目　（2004）は声調（240 字）、声母（113 字）、韻母（107 字）、基礎語彙 173、文法用例文 37 と短い物語１つを収集した。2 回目（2013 年）は語彙（1200、一人分）に加えて自然談話（一人での語りも含む。以下同様）を収集した。3 回目（2014 年）は自然談話 3 時間ほど、漢字（1000 字）、基礎語彙（1200、一人分）、客家語特徴語彙（1000）収集した。4 回目（2015 年）は自然談話のデータのみを収集した。

(5) 収集したデータを整理し、文字化を行った。更にその文字化したテキストをもとに研究を進め、次の通りの成果を出した。2014 年に論文「平江塘坊客家語研究」を東京外国語大学記述言語学研究室編『思言』第 10 号に掲載した。2015 年に国際学会にて「塘坊客家語と平江方言の接触」というタイトルで口頭発表を行った。

(6) データに対する分析から次のような発見があった。塘坊客家語と地元の平江方言で共通している点は「呼称表現 lao、話題標記 shi、所有表現 ke、程度副詞 man」などであり、客家語の特色を保っている点は「否定詞 m、持続アスペクト kin、完了アスペクト li、二系列の指示詞」などである。このように塘坊客家語は地元の平江方言と客家語の特徴をそれぞれ持っている。

(7) 消えつつあるこの移民言語の継承・再活性化の道を探るためにも、話者が完全になくなる前に自然談話データを採集し、辞書、文法書とテキストを作成する必要性が見えている。

2.　研究の目的

三年間の目標は下記の（1）～（4）である。

(1) 自然談話データを採集し、分析を行い、音韻及び文法の記述を完成する。語彙を収集し、辞書を作成する。自然談話のデータに基づき、テキストを作成する。研究資料に基づき、教材を作成し、客家語講習会を開催し、地元で客家語が使いやすい環境を作る。

(2) 音韻と語彙体系を明らかにする。基礎語彙表で基礎語彙を収集、客家語特徴語彙表を用いて特徴的な語彙を採集する。自然談話データからも語彙を抽出し、基礎語彙と特徴語彙をあわせて辞書を作成する。語彙データに基づき語構成などを分析する。

(3) 自然談話データを採集し、口語コーパスと教育用教材を作成する。自然談話のデータを増やし、口語コーパスを完成させながら、文法の記述を進める。辞書の作成も念頭に置いて語彙、音韻などに併せ、全体の記述を完成する。

(4) 塘坊客家語は地元の平江方言と約 400 年間接触しあっているため、現在の姿はその接触の結果である。現在の塘坊客家語の全貌を明らかにし、地元の平江方言、移民元の広東省の客家語と比較対照を通して、移民してきた塘坊客家語のこれまでの発展プロセスを究明する。移民言語の継承及び接触研究に事例を提供する。

３．研究の方法

(1) フィールドワークでは面接調査によって、資料収集と録音、録画による自然談話資料の収集を行う。面接調査と自然談話の観察、録音、録画はメディアデータを残すためにも非常に大事なことで、本研究の重要な柱である。

(2) 面接調査では、漢語の方言データ採集によく用いられる調査表を利用し、文字（1000）、語彙（1200）、例文（219）で資料収集を行い、録音、録画も行う。

(3) 自然談話と調査表両方の調査で資料を収集することで、データの偏りを未然に防ぐことができる。

(4) 録音・録画データを文字化し、方言のデータベースを構築する。構築したデータベースから実例を収集し、分析や考察を経て、それぞれの言語成分の機能を明らかにする。

(5) 塘坊以外の客家語などの移民言語や地元の方言との比較対照を通して、移民言語の特徴や現状を明らかにし、移民言語の発展メカニズムを究明する。そのため、仮塘坊客家語に重要な影響を与えたと推定される広東省の梅州客家語や台湾の客家語も調査する。

(6) 研究発表や論文では漢語方言や標準語の研究では従来採用されていなかったグロス付けを行った。例文にグロスをつけることでそれぞれの要素と機能がより一層明確になる。

(7) データの整理に関してはソフトウェア EmEditor と Toolbox を活用する。映像データの分析や字幕をつける作業はソフトウェア Elan を用いる。データの分析にはツール AntConc を用いる。

４．研究成果

(1) 本研究でデータの採集、整理、分析などを行った結果、メディアデータから、文字データ（方言本体の語彙、自然談話等）、更にはそのデータに対する分析で書き上げた論文まで多くの成果を残したと言える。

(2) 当初は平江県内の客家語と平江方言の接触を中心に研究を進める予定であったが、実際に研究していく中で、ほかの客家語の状態も見ることにした。結果的に平江県内（連雲村、天林村、大岩村）を含め、湖南省資興市、江西省贛（カン）州、広東省梅州市、台湾桃園市、台中市の計 8 地点の客家語の資料を収集した。データ分析を通して、移民言語の横のつながりを確認できた。同時に各地の客家語について多様なデータ（録画・録音及び文字データ）を採集し、残すことができたことは大きな成果の一つといえる。フィールドワークではいずれの地点でも移民言語を話す話者が減りつつある状態であることを確認した。

(3) 塘坊客家語の音韻、語彙、文法を記述し、更に地元平江方言やその他の移民言語との比較

対照を行ったので、移民言語のメカニズムを究明できた。異なる世代の語彙データから、著しい差異が見られ、接触言語によくみられる事例を確認した。

(4) 実際に塘坊客家語の自然談話資料から得られた結果（否定表現が周りの方言より多い事実）をもとに、自然談話資料を利用して文法研究を行うことの大切さを確認した。地元の平江方言における否定表現は 3 系列：事実否定「mao」（ない）、意志の否定「pu」（～ない）、命令の否定「mo」（しないで）であり、客家語の否定表現も一般に三系列 ：事実否定「mao」（ない）、意志の否定「m」（～ない）、命令の否定「mo」（しないで）である。しかし、塘坊客家語における否定表現は４系列：事実否定「mao」（ない）、意志の否定「pu」（～ない）、意志の否定「m」（しない）と命令の否定「mo」（しないで）になる。塘坊客家語における意志の否定「～ない」は「pu」と「m」の二つであり、使い分けもしている。これはまさに地元の平江方言と客家語の両方の否定表現を取り入れている混合言語の特徴といえる点である。

(5) 塘坊客家語と地元の平江方言の指小辞の比較対照を行った。これは自作の塘坊客家語の自然談話コーパス資料にみられる名詞接辞「tsi」と地元の平江方言の自然談話コーパス資料における「tse」のそれぞれの実例に基づく分析である。研究結果では、次のことが判明した。塘坊客家語における「tsi」は主に一般名詞や親族名詞の指小辞として使われる。それ以外に地元の平江方言における指小辞「tse」と同じく数量詞、動量詞や動詞目的語に用い、量の限定や動作の緩和を表す実例も見られた。塘坊客家語における「tsi」の複雑な用法は塘坊客家語と地元の平江方言の融合した結果であることを確認した。

(6) 平江塘坊客家語、連雲客家語、天林客家語、梅州客家語、地元平江方言の 5 つの方言における基礎語彙（1200）で比較対照をした。語彙の比較を通して、平江県内部における客家語は互いの交流が少ないにもかかわらず語彙における統一度が高いことが判明した。地元平江及び客家語梅州方言とも比較し、これらの客家語が平江に移民してから地元の平江方言と絶えず接触交流した結果、平江方言の語彙を多く取りこんでいるが、客家語の語彙と特徴をまだ多く保っていることが判明した。更に塘坊客家語と連雲客家語の語彙は平江方言と客家語が混ざった語彙体系になっていることを確認した。

(7) 1953 年生まれと 1963 年生まれの従兄弟からそれぞれ塘坊客家語の 1200 語を採集し、比べてみた結果、1200 語のうちの 200 語に差異が見られた。この 200 語のうち、平江と同じものが、兄は 87 語、弟は 68 語である。同じ調査語彙に対して、異なる表現が見られるものが六分の一（200/1200）を占めることから、普段から二種類の表現が存在しているということが言える。それは平江方言の表現がすでに客家語に根付いているということを意味する。これもまさに接触言語によくみられる事例である。

(8) 塘坊客家語と地元の平江方言における童謡から出発し、全国各地の童謡（1900）を対象に、その言語及び地域的な特徴を考察した。研究結果から、次のことが判明した。童謡の文化的特徴として、素材、概念、形式などにおける類似性がみられ、教育的な役割を担うものが多いことが言える。童謡の言語特徴として押韻、押音（韻脚に同じ音節を用いる）、同音による文字交替、語彙によるしりとり、問い詰め、重複が見られる。地域的特徴としては、遠く離れている地域でも類似したような童謡が見られた。例えば、「打鉄歌」（鍛冶の歌）は湖南省、湖北省、四川省、「儂貴姓？」（お名前は？）は呉語地域、「月光光，照四方」（お月様、明るく照らす）は粤語地域、「月光光，秀才郎」（お月様、秀才さん）は客家語地域で見られる。「月光光」（お月様）という童謡は地元の平江方言、塘坊客家語や台

湾客家語にもみられる。各地の童謡は各地の方言特徴と文化特徴を表し、異なる地域や方言にも似たような童謡が見られることを確認できた。

(9) 塘坊客家語と平江方言に見られる尊称接辞「lao」を中心に研究を行った。塘坊客家語と同様、平江方言の「lao」は名の第一字に付き、上の世代（親の世代の村人へ）、同世代（夫婦間、同僚同士、兄弟姉妹間）、下の世代（姑から嫁、叔母から甥へ）への使用が可能である。「lao」は尊敬の気持ちがあれば、自分の子供にも使用できる。本研究では湖南省、江西省の方言を中心に全国の方言を対象に「lao」の使い方について SNS（Wechat）やアンケートで調査を行い、「lao」の由来も究明した。「lao」の尊称機能を明らかにするため、さらに同じく尊称接尾辞を持つ日本語と現代韓国語との比較対照も行い、形式、機能と使用範疇から三つの言語における尊称の共通点や使い分けを確認した。客家語では元々尊敬を表す「lao」を持たないが、塘坊客家語における「lao」は地元の平江方言との接触の中で取り入れたものであり、その用法も平江方言とほぼ同じであることを確認できた。

(10) 塘坊客家語と地元の平江方言における多機能アスペクト助詞の比較対照を行った。これまでの研究では、塘坊客家語と地元の平江方言はそれぞれ異なるアスペクト助詞「li」（塘坊客家語）、「ta」（平江方言）を使用するという結果であった。本研究は塘坊客家語の自然談話コーパスにアスペクト助詞「ta」の実例（約 100 例）があることからその 3 者（「ta」（平江方言）と「ta」（塘坊客家語））、「li」（塘坊客家語））の比較対照及び関係の究明を行った。三者の主な用法は、アスペクト助詞として、完了、持続、変化、結果などに用いるものである。更に不合理状態（形容詞の後）、目的地（場所詞の後）などに使用されることで共通している。「li」（塘坊客家語）は量の限定（量詞の後）と「可能」に使用されるが、「ta」（平江方言）は「命令」に用いられるところで相違を見せている。塘坊客家語においては、「ta」と「li」が共存しており、その機能もほぼ重ねる。その「ta」の用法も平江方言の「ta」と同じようなものである。そこで、客家語の「ta」は平江方言の「ta」を受け入れた結果であることを確認した。

(11) このように平江方言との 400 年にもわたる接触の過程で、塘坊客家語は客家語の特徴を保ちながらも、基礎語彙、指小辞、尊称接辞、否定表現、アスペクト助詞など語彙や文法の面から影響を受けている。接触のプロセスには、三種類の現象が見られる。文法に関しては、元々持っていないものは、表現と用法をそのまま受け継ぐ。元々持っているものは一部の用法を受け継ぐ。語彙に関しては客家語と平江方言のものを共存させる。このように移民言語客家語と地元の平江方言の接触に関してジャンルが異なるものは受ける影響も異なることを確認した。

(12) 本課題は国際学会での発表などを通じて、国際中国語学会や中国方言学会に注目され、言語接触の研究に貢献し、言語接触の研究に事例を提供できた。本課題は漢語方言学の新たな研究として、主に自然談話データに基づき、消滅危機に瀕している塘坊客家語の音韻、語彙及び文法を記述し、移民言語の接触プロセス及び発展のメカニズムを研究した。消滅に瀕する言語のメカニズムの解明に貢献でき、更に危機言語の維持、保護や継承にも参考となる事例を提供できたといえる。

(13) 当初は研究データに基づき、教材を作成し、講習会を開催するなど言語の復興にも力を入れる予定であったが、最終年度及びその延長した年も現地に行ける機会が減り、実現できなかった。これは今後の課題にしたい。これからは更に手元の膨大なデータを整理し、各地の移民言語客家語のそれぞれの接触についても研究していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 張盛開	４．巻 2
２．論文標題 平江方言中的多功能動態助詞（平江各方言における多機能アスペクト助詞）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岩田礼教授栄休記念論文集	６．最初と最後の頁 348-375
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 張盛開	４．巻 4
２．論文標題 平江方言的尊称後綴lao	５．発行年 2021年
３．雑誌名 静言論叢	６．最初と最後の頁 57-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 張盛開	４．巻 1
２．論文標題 童謡的語言与地域特徴	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第七届海外漢語方言国際学術検討論文集	６．最初と最後の頁 228-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 張盛開	４．巻 3
２．論文標題 「平江各地客家語語彙対比研究」（A Compare study On Pingjiang Hakka-Dialects）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 静言論叢	６．最初と最後の頁 155-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 張盛開	4．巻 2
2．論文標題 平江方言的 ” 得 ”	5．発行年 2019年
3．雑誌名 静言論叢	6．最初と最後の頁 93-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 張盛開	4．巻 14
2．論文標題 平江方言韻編『又一経』について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アジア研究	6．最初と最後の頁 9-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 張盛開
2．発表標題 平江方言的尊称詞綴－続編（平江方言の尊称接尾辞）
3．学会等名 第15回漢語方言研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 張盛開
2．発表標題 平江方言的 “ ta ” 与平江客語的 “ li ” （平江方言の「ta」と平江客家語の「li」）
3．学会等名 第14回漢語方言研究会
4．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 張盛開
２．発表標題 口語語料的調査（口語コーパスの調査）
３．学会等名 第二回南方漢語方言学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 張盛開
２．発表標題 従童謡看方言与文化（童謡からみる方言と文化）
３．学会等名 「一帯一路」視点における言語文字の研究シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 張盛開
２．発表標題 童謡的語言与地域特徴（童謡の言語と地域特徴）
３．学会等名 第七回海外漢語方言学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 張盛開
２．発表標題 塘坊客語的“子”（塘坊客家語における「子」について）
３．学会等名 第26回国際中国言語学会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 張盛開
２．発表標題 平江各地客家詞彙対比研究
３．学会等名 第13回客家語国際学会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 張盛開
２．発表標題 口語語料標注与詞典制作ー以湖南塘坊客家話為例（方言口語資料の注釈と辞書の作成―湖南省塘坊客家語を例として）
３．学会等名 第一回南方漢語方言国際学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

危機方言ー塘坊客家語の記述 https://wwp.shizuoka.ac.jp/hanyushizhe/ 漢語使者の研究室 https://wwp.shizuoka.ac.jp/hanyushizhe/%e7%a0%94%e7%a9%b6/%e8%ab%96%e6%96%87/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関